

機関番号：23803

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2007 ～ 2010

課題番号：19320120

研究課題名（和文） 歴史認識共有の実験～仏独共通歴史教科書の射程～

研究課題名（英文） Experiment of Common Historical Understanding: Perspective of the French-German Common History Textbook

研究代表者

剣持 久木 (KENMOCHI HISAKI)

静岡県立大学・国際関係学部・准教授

研究者番号：60288503

研究成果の概要（和文）：2006年秋からフランスとドイツの教育現場に導入された、共通歴史教科書を、教科書成立に至る過程、歴史的背景から教科書の内容の分析、仏独両国での教科書の評価、現場での使用状況、さらには東アジアなど他地域への応用可能性を研究した。その結果、実際の使用状況は、二言語学級での使用など限定的であるという実情が明らかになったものの、ドイツ・ポーランド間でも同様の計画が具体化するなど、仏独の事例は限界をもちつつも国際歴史教科書対話のなかで一つのひな形の役割を果たしていることが確認された。

研究成果の概要（英文）： We have studied the history textbook produced jointly by France and Germany and in use since 2006, analyzing its background, the way it was made, its contents, its reception both in the classroom and in society as a whole, and its perspective toward other regions in the world, especially East Asia. As a result of our research, it has become clear that regular use of this textbook remains limited to relatively few situations, such as in bilingual classes. On the other hand, we have confirmed that the French-German history textbook served as a "model" for another binational project, the German-Polish one.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	3,800,000	1,140,000	4,940,000
2008年度	3,200,000	960,000	4,160,000
2009年度	3,200,000	960,000	4,160,000
2010年度	2,900,000	870,000	3,770,000
年度			
総計	13,100,000	3,930,000	17,030,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・西洋史

キーワード： 歴史認識、歴史教科書、ドイツ、フランス、歴史和解、東アジア

1. 研究開始当初の背景

2005年国際歴史学会議（シドニー）で歴史教科書部会（西川正雄氏基調報告）が開催されるなど、学術研究レベルでも歴史認識問題に世界的な注目が集まるなか、仏独で史上初めての国境を越える歴史教科書が2006年秋から導入されるという報道に接して、「歴史認識共有」の射程を具体的に検討する共同

研究を立ち上げた。

2. 研究の目的

本研究は、仏独共通歴史教科書成立の背景、過程、その内容、社会的受容、教育現場の反応を調査、分析することによって、国境を越えた歴史教科書の可能性を考察することを目的とした。また、独仏共通教科書に関する

調査ならびに分析の結果に基づき、仏独以外にも世界科各地で進行している歴史対話、とくに東アジアの歴史認識問題への同プロジェクトの波及効果ならびに影響を展望することも目的としていた。

3. 研究の方法

(1) 仏独両国における関係諸機関との協力関係、ネットワークの構築：ドイツのゲオルク・エッカー特国際教科書研究所、フランスの歴史地理教員協会 APHG はいずれも、仏独歴史対話の当事者であると同時に歴史教育、歴史教科書に関する研究機関であるが、両機関との緊密な協力体制のもとに研究を進めた。なお、西山は前者、剣持は後者の研究雑誌にも協力している。

(2) 仏独両国の教育現場の視察：仏独共通教科書を使用している授業の視察を行うとともに、教員、生徒にアンケート調査を実施し、同教科書に対する評価を確認している。地域性、代表性も考慮して、ドイツはベルリン、ボン、ザールブリュッケン、フランスはパリ、ストラスブール、ランス、マルメゾンの高校で、共通歴史教科書を使用するクラスを視察した。

(3) 共通教科書作成にかかわった関係者へのインタビュー調査の実施：仏独共通教科書の指針を決定した指導委員会のなかでは、フランス側は、エティエンヌ・フランソワ（ベルリン自由大学）、ピエール・モネ（パリ社会科学高等研究院）、マルセル・スピセール（ストラスブール大学区視学官）、ドイツ側はライナー・リーメンシュナイダー（元ゲオルク・エッカー特国際教科書研究所）、ロルフ・ヴィッテンブローク（ザールラント大学）、教科書執筆者では、フランス側はダニエル・アンリ（アンリ4世高校）、ギヨーム・ルカントレック（アンリ4世高校）、ベネディクト・トゥーシュブフ（マルメゾン高校）、ドイツ側はペーター・ガイス（フリードリヒ・エーベルト高校）の各氏と面談し、聞き取り調査を行った。

(4) 研究成果の公表：研究開始当初から、仏独、ヨーロッパはもちろん、東アジアを含めた他地域の歴史対話問題の研究者を交えた研究交流/発表の機会に積極的に参加している。2007年には南京事件70周年の一連のシンポジウムで剣持（パリ第一大学）、川喜田（明治大学）が報告し、2008年にはゲオルク・エッカー特国際教科書研究所のシンポジウム「歴史教育と和解」に川喜田が、パリ高等師範学校でのラウンドテーブル「歴史教科書と記憶の争点」に剣持がそれぞれ参加している。2009年にはアジア世界史学会 AAWH に川喜田が、欧州歴史教員協会 EUROCLIO に剣持がそれぞれ参加している。さらに2010年には、日本西洋史学会大会で、

上記ヴィッテンブローク氏に加えて、東アジア共通歴史教材『未来をひらく歴史』執筆者の齋藤一晴氏（明治大学）、高校教員として仏独共通教科書を使用した授業実践の経験を持つ松井克行氏（大阪府立三島高校）を交えて、総括的シンポジウムを開催している。また西山はヴィッテンブローク氏とともに中国、長春の東北師範大学で開催された国際フォーラムにも参加している。さらに研究全期間を通じて、共通教科書関係者、歴史対話研究者を招いた講演会を数多く実施している。

4. 研究成果

(1) 2007年10月に、東京ドイツ文化センターと日仏会館の共催の連続シンポジウムに剣持が参加し、仏独共通教科書の歴史的意義を解説し、同年に実施した現地アンケート結果と共に、『歴史認識共有の地平』にシンポジウム記録を掲載した。掲載論文の中では、世界各地で進行している共通歴史教材を紛争解決モデルと和解到達モデルにわけ、仏独を後者に分類している。

(2) 2008年には、共通教科書成立の背景や内容分析の成果を剣持と西山が『歴史学研究』に掲載している。また、「欧州統合と東アジア共同体」をテーマにした国際シンポジウムでは、「記憶・和解・社会体文化的交流」セッションを担当し、前述のピエール・モネ氏に加え、独仏青少年事務所 OFAJ 研究の専門家ハンス・マンフレート・ボック氏、それに西山が報告を担当し、その記録は翌年『欧州統合の半世紀と東アジア共同体』として公刊されている。また、この年には前述のエティエンヌ・フランソワ氏と仏独関係者の第一人者ライナー・フーデマン氏（パリ第4大学）を招いて、「ヨーロッパの記憶の場としての共通教科書」をテーマに連続講演会を実施している。

(3) 2009年には、仏独教科書成立の背景としての、両大戦間期以来の仏独歴史家交流に注目し、仏独両国の専門家、コリーヌ・ドゥフランス（CNRS）、ウルリヒ・プファイ（メッス大学）両氏を招いた連続講演会を実施した。なお、仏独歴史家交流の最新の成果である『第一次世界大戦仏独共同通史』（ジャンジャック・ベケール、ゲルト・クルマイヒ著）は、剣持と西山の共同翻訳の出版を準備中である。さらにこの年は、前述の西洋史学会準備のために、齋藤、松井両氏に加え、日中歴史共同研究の日本側メンバーの庄司潤一郎氏（防衛研究所）も交えたワークショップを開催している。

(4) 最終年度の2010年度は、前述の西洋史学会での総括シンポジウムに加え、刊行が遅れている共通教科書第三巻の現状調査を剣持が実施している。その結果、遅くとも

2011年夏までには刊行されるという見通しがあるものの、当事者の間では悲観的な展望が一部に広がっている実態も確認できた。

また、川喜田は、仏独に続いて共通教科書構想が具体化しているドイツ・ポーランド間のプロジェクトについて、ドイツ＝ポーランド共通教科書プロジェクト諮問委員会ならびに専門家委員会メンバーのミヒャエル・G・ミュラー氏（ハレ大学）、同プロジェクトの事務局を担当するトーマス・シュトゥローベル氏（ゲオルク・エッカート国際教科書研究所）にインタビュー調査を行なった。

2010年度は、さらにフランス人日本史研究者であるアルノー・ナンタ氏（CNRS）による「日韓・フランス・アルジェリア関係の比較」や、日中歴史和解研究の第一人者、楊大慶氏（ジョージ・ワシントン大学）などを招いたワークショップも実施し、歴史認識問題の国際比較への展望も行っている。

(5) 本研究の枠内で展開された各種のインタビュー調査、アンケート調査、授業視察、教科書分析、研究交流等の成果に基づき、以下の考察をすることができる。仏独教科書は両国において基本的に好意的に迎えられた。記述内容に対する個別具体的な批判点は多くあるが、国際歴史対話における「共通教科書」という方法は、とりわけ①両国の視点を取り入れた複眼的歴史記述の実現、②両国の歴史教科教授法における優れた点の相互摂取、③相互理解・信頼の醸成につながる社会的啓蒙効果等の各点において評価できる。一方、①政治的支援を受けたトップダウン・イニシアティブによるプロジェクトであることから生じる政治と学術のあいだの緊張関係、②出版社を通じて販売される書籍であることから生じる制約（商業的成功を必要とすることから二言語学級等の制度をもたない地域では実現困難と考えられる）、③指導要領の改訂への対応の難しさ、等の問題点もあり、国際歴史対話の手段としてそれが有効性をもつためには多くの条件が前提となる。

(6) 本共同研究の今後の展望としては、仏独共通教科書の後継プロジェクトであるドイツ＝ポーランド間のプロジェクトの進展に注目している。現在のところ、ドイツ＝ポーランド間のプロジェクトは、仏独の経験を意識的に参照しつつ進められている。仏独教科書の成果と限界を明らかにしてきた本共同研究としては、ドイツ・ポーランド共通教科書プロジェクトが、仏独の前例をどのように生かし、その限界（とくに使用率の低さ、政治と学術の緊張関係）にどのように挑戦するかに関心を持っている。その展開の如何によって、共通教科書が国際歴史対話の方法として根づくかどうかの帰趨が明らかになるであろう。なお、本共同研究の総括的な研究報告と今後の展望については、川喜田の論文

が『西洋史学』に掲載される予定である。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計16件）

川喜田敦子「ヨーロッパにおける国際歴史教科書対話の現在—ドイツ＝フランス共通教科書からドイツ＝ポーランド共通教科書へ—」『西洋史学』査読有、2011年、244号、掲載決定

Akiyoshi Nishiyama, “A Transnational History Textbook for East Asia? Some Considerations from a Japanese Research Project on French-German History Textbook”, *Program and Documents of the Workshop for the Ideas, Challenges, and Experiences of Making Peace in the Twentieth Century. T44b The Third China-Europe Social*, 査読無、2010, pp. 29-32.

エティエンヌ・フランソワ、劍持久木「仏独共通歴史教科書—作成現場からの中間報告—」『国際関係・比較文化研究』査読無、2009、8巻1号、137-149頁

Akiyoshi Nishiyama, "Ein Ziel in weiter Ferne? Das gemeinsame deutsch-französische Geschichtsbuch aus japanischer Sicht", *Revue d'Allemagne*, 査読有、2009, 41-1, pp.105-123.

Hisaki Kenmochi, “L’affaire du sekaishi au Japon: Un cours d’histoire Universelle remise aux oubliettes”, *Historiens & Geographes*, 査読無し 2008, No.403, pp.33-40.

劍持久木・西山暁義「歴史認識共有の可能性—仏独共通歴史教科書の実験—」『歴史学研究』査読有、2008、840号、38-62頁

Akiyoshi Nishiyama, “Das deutsch-französische Geschichtsbuch in Japan. Ein Vorbild für Ostasien?”, *Eckert. Das Bulletin (des Georg-Eckert-Instituts für internationale Schulbuchforschung)*, 査読無、2007, 2, pp.59-60.

〔学会発表〕（計23件）

Akiyoshi Nishiyama, “A Transnational History Textbook for East Asia? Some

Considerations from a Japanese Research Project on French-German History Textbook”, *The Third China-Europe Social Forum*. T44b, 2010年7月10日、東北師範大学（中国、長春）

劍持久木、西山暁義、川喜田敦子、Rolf Wittenbrock、松井克行、齋藤一晴、「シンポジウム ドイツ・フランス共通歴史教科書の射程」、日本西洋史学会第60回大会、2010年5月30日、別府大学

Rainer Riemenschneider, Hubert Tison, Hisaki Kenmochi, Table ronde “L’invasion germanique. Faut-il avoir peur d’enseigner les invasions barbares à l’école?”, 2010年3月17日、Palais de la Porte Dorée, (Paris、フランス)

Hisaki Kenmochi, Hubert Tison, Daniel Henri, Sophie Coeuré, “Manuel d’histoire et enjeux mémoriels, regards croisés (Japon, France, Allemagne)”, Table ronde Science-po/ENS, 2009年3月11日、Ecole Normale Supérieure, (Paris、フランス)

劍持久木「独仏共通歴史教科書の実験～背景、内容、現場～」、近代社会史研究会、2008年10月25日、京大会館

西山暁義「国境を越える教科書－独仏共通歴史教科書の内容と実践」、国際シンポジウム「欧州統合半世紀と東アジア共同体」（東京大学ドイツ・ヨーロッパ研究センター・日仏会館共催）、2008年4月18日、日仏会館

川喜田敦子「現代ヨーロッパの歴史認識問題と国際教科書対話－ドイツと隣国の例から－」、南京事件70周年東京国際シンポジウム、パネル4「ヨーロッパでは戦争責任をどう議論しているか」、2007年12月16日、明治大学

Hisaki Kenmochi, “Les manuels scolaires japonais face à l’Asie d’Est”, Journée d’étude: Trace de guerre, Nankin 1937-2007, 2007年12月16日、Université de Paris I, (Paris, フランス)

川喜田敦子「変容する地域秩序と歴史認識－ドイツとフランスの例から－」、大阪大学世界言語研究センター国際シンポジウム「歴史における地域の形成」、2007年11月27日、大阪大学

劍持久木、コリーヌ・ドゥフランス「仏独和解と共通歴史教科書の成立」、シンポジウム「独仏和解のプロセスと共同歴史教科書プロジェクト」、2007年10月19日、東京ドイツ文化センター

〔図書〕（計8件）

黒沢文貴、イアン・ニッシュ、劍持久木『歴史と和解』、東京大学出版会、2011年刊行決定

廣田功、西山暁義、ピエール・モネ、ハンス＝マンフレート・ボック、劍持久木『欧州統合の半世紀と東アジア共同体』、日本経済評論社、245頁、2009年

劍持久木、小菅信子、リオネル・バビッチ『歴史認識共有の地平－独仏共通教科書と日中韓の試み－』、明石書店、238頁、2009年

〔産業財産権〕

○出願状況（計 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計◇件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

劍持久木 (KENMOCHI HISAKI)

静岡県立大学・国際関係学部・准教授

研究者番号：60288503

(2) 研究分担者

西山暁義 (NISHIYAMA AKIYOSHI)
共立女子大学・国際学部・准教授
研究者番号：80348606

川喜田敦子 (KAWAKITA ATSUKO)
大阪大学大学院・言語文化研究科・准教授
研究者番号：80396837

2007年度のみ

中本真生子 (NAKAMOTO MAOKO)
立命館大学・国際関係学部・准教授
研究者番号：80330009

(3) 連携研究者